

## GPS ロガーを用いたカワウの行動追跡調査の状況について

大きな漁業被害をもたらしているカワウの防除については、各漁業協同組合が多大な労力をかけコロニー（水際の樹上にあり、集団繁殖地と集団営巣地の両方を示す）と被害発生地（河川湖沼漁場）の双方で対策を行ってきましたが、コロニーと被害発生地の位置関係が特定されておらず、コロニーでの対策が被害発生地の状況に及ぼす影響等を評価することが難しい状況にあります。しかしながら、近年急速に発展しつつあるバイオロギング技術（発信器の装着による生物の行動追跡）を用いることにより、コロニーと被害発生地の位置関係を把握し、カワウ防除対策を高度化することが可能になると考えられます。そこで、（国立大学法人）長岡技術科学大学工学部、国立研究開発法人 水産研究・教育機構水産技術研究所 環境・応用部門、栃木県鬼怒川漁業協同組合と連携しカワウの幼鳥に GPS ロガーを装着し行動追跡を実施しているので、その状況について報告します。

これまでに県北のコロニーにおいて GPS ロガーを装着したカワウ幼鳥 1 羽から 2 ヶ月間（令和 2 年 7 月 14 日～9 月 15 日）の行動履歴に関する情報を得ることができました。

その結果、カワウ幼鳥は成長に従い行動範囲が拡大し、8 月末に主な餌場を鬼怒川から箒川にシフトさせたことが分かりました。

鬼怒川は放流アユ主体の漁場であり、8 月末になるとアユの釣れ具合は低下してしまうことが多いことが知られています。一方、水産試験場の調査によると令和 2 年度は、箒川はアユの釣れ具合が相対的に良く、9 月から 11 月にかけて釣れ具合は上昇していきました。

カワウはアユ以外の魚種も捕食対象としていますが、この行動の変化はエサの量が多いあるいは、エサが捕食しやすい河川を利用するというカワウの合理性に裏打ちされたものだと推測されました。

今後は、成鳥にも GPS ロガーを装着しその行動履歴を明らかにし、合理的なカワウ対策の立案と実行に活用したいと考えています。



写真 ロガーを装着したカワウ